



人が輝き まちがときめく ふれあい交流都市 登別市



登別市基礎データ

総人口	46,919人 (令和2年10月末)	漁獲高	8億4,809万円 (平成30年度水産統計)
高齢人口（高齢化率）	17,185人（36.6%） (令和2年10月末)	製造品出荷額	214億2,314万円 (2019年工業統計調査)
世帯数	24,522世帯 (令和2年10月末)	卸・小売年間販売額	552億2,500万円 (平成28年経済センサス)
人口密度	221.1人/km ²	一般会計規模	218億2,500万円 (令和2年度当初予算)
面積	212.21km ²	市の花	キク
農業産出額	10億1,000万円 (平成30年度農業統計)	市の花木	ツツジ
		市の木	プラタナス

登別市の紹介

北海道の南西部に位置し、東西18.5km、南北22.6kmの菱形に近い形状をした登別市は、南は太平洋、北はオロフレ峠や来馬岳を形成する山岳地帯に挟まれ、海岸に沿って市街地を形成し、海と山の豊かな恵みを生かした国内有数の観光都市として、発展してきました。

7・8月の盛夏でも25度を越える日は少ない一方で、真冬でも最低気温がマイナス10度以下になることがほとんどなく、積雪量も比較的少ないなど、一年を通じて、過ごしやすい登別市は、高速道路を利用すれば、中心街から新千歳空港まで約1時間、札幌中心部へも約1時間30分で行くことができ、JRや高速バスも運行しているなど、各地へのアクセスも優れています。

市内においては、第24回ふるさとイベント大賞の内閣総理大臣賞を受賞した『地獄の谷の鬼花火』をはじめ、登別地獄まつりや登別温泉湯まつりなど、一年を通して開催される四季折々のイベントがまちを盛り上げています。それらの多くは、地域住民や市内事業者などのボランティアスタッフにより支えられており、市民と行政による協働のまちづくりが進んでいます。

市制施行50周年を生かしたまちづくり

道内30番目の市として、昭和45年8月1日に市制を施行した登別市は、令和2年に市制施行50周年を迎えました。

本市では、市内の約50団体によって設立された市民実行委員会などをはじめとした多くの市民と共に、次の50年先の登別市が魅力あるまちであり続けるよう、この記念すべき年を『市民活動の活性化』、『産業活動の活性化』、『まちづくり人材の発掘』の3つのきっかけとすべく、平成30年から取り組みを進めてきましたが、新型コロナウイルスの感染拡大により、記念式典をはじめ、令和2年に予定していた多くの事業が延期や中止を余儀なくされてしまいました。

生活様式さえも大きく変わった令和2年7月、本市では、市制施行50周年をこのまま終わらせることなく、『今できる』、そして『将来の登別につなぐ』事業をと『Be Smile プロジェクト』を立ち上げました。

同プロジェクトは、学校行事や部活動、友人との外出などが制限され、たくさんの思い出づくりの機会がなくなっている登別の子もたちを元気に、そして笑顔を届けようというもの。プロジェクトの内容は、市内の高校

2年生が中心となって、卒業する先輩たちをはじめ、未就学児、小学生、中学生を思い、どんなことをしたら喜んでもらえるかを考え、実行してもらいました。まちづくりに自分たちの手で参加することで、まちづくりの楽しさを知る。当初、期待していた3つのきっかけの一つ『まちづくり人材の発掘』につながるプロジェクトです。

令和2年10月31日、11月1日の2日間には、メインプロジェクトとして、『Be Smile Festival〜コロナに負けない私たちへ〜』を開催。市内にある『のぼりべつクマ牧場』、『登別マリンパークニクス』、『登別伊達時代村』という3つのテーマパークと登別温泉の日帰り入浴施設を高校生以下の子どもたちに無料開放するとともに、会場内では、高校生によるダンスや書道などの部活動の発表、ロケット教室などを行いました。笑顔あふれた2日間には、延べ約3,000人の子どもたちが参加し、友だちや家族と共に、市内の魅力を改めて肌で感じるとともに、令和2年を彩る素敵な思い出の1ページをつくっていました。

また、同プロジェクトに賛同していただいた登別国際観光コンベンション協会やまちづくり団体などが主体となり『地獄の谷の鬼花火』と『チャリティドライブインシアター』も開催。例年、登別地獄谷を舞台に6月から7月に開催している『地獄の谷の鬼花火』は、令和2年度、中止となっていました。子どもたちのために、開催場所を小学校のグラウンドなどに変え、市内6カ所で特別開催。また、『チャリティドライブインシアター』は、登別伊達時代村駐車場に巨大なスクリーンを設置し、車の中から映画を鑑賞する市内初の試みで、多くの子どもたちが、いつもとは違う特別な時間を体験しました。

なお、同プロジェクトにかかる経費の一部は、株式会社トラストバンクが展開するふるさと納税型のガバメントクラウドファンディングを活用して寄付を募っており、令和2年11月末時点で300万円を超える寄付をいただき、実施することができました。

本市は、こうした取り組みによって、将来

を担う子どもたちが地域への感謝や愛着を育み、次の50年先の登別へとつながっていくものと考えています。



登別地獄谷を飛び出し、市内の学校グラウンドで披露された『地獄の谷の鬼花火』



車の中で、家族と共に映画を楽しんだ『ドライブインシアター』



テーマパークごとの魅力とともに、思い出の1ページに刻まれた「Be Smile Festival」

登別におけるアフターコロナ

日本を代表する温泉地として、観光関連産業を基幹に発展してきた本市は、登別温泉地区以外においても、『カルルス温泉サンライバスキー場』で、夏のスキー場の活用も兼ねたシカ角拾いやシカ角加工体験を実施するとともに、『登別市ネイチャーセンター』では、リバートレッキングやスノーシューなどを使った体験型メニューを活用したツーリズムを推進するなど、全市的に登別観光を楽しめる体制整備を進めてきました。

現在においては、世界的な新型コロナウイルス感染症の拡大により、国内外からの観光客が激減している中、登別国際観光コンベンション協会と共に、対策を検討・実施しています。

その第1弾として、令和2年6月の都道府県をまたぐ移動自粛要請の全面解除の時期にあわせ、市民のコロナ疲れを癒していただくことを主な目的に、登別国際観光コンベンション協会が実施する市内のホテルに宿泊した市民を対象に、宿泊施設やお土産店等で利用できるクーポンを配布する取り組みを支援し、多くの市民に登別温泉・カルルス温泉をご利用いただきました。

また、その後は、隣まち・白老町におけるウポポイ（民族共生象徴空間）開館による教育旅行の増加や北海道の「どうみん割」、国の「Go to キャンペーン」などにより、本市を訪れる観光客は若干の回復を見せていますが、例年に比べると依然として低い水準が続いています。

今後は、市内の温泉ホテル・旅館に宿泊いただいた観光客に対し、オリジナルノベルティの配布やSNSキャンペーンなどを通じた情報の発信のほか、観光案内のICT化、既存の観光資源の磨き上げなどの取り組みを支援することにより、新しい生活様式に対応しつつ、観光客の利便性の向上、さらなる誘客を図っていきます。

登別観光の玄関口ともいえるJR登別駅周辺においては、かねてよりJR北海道と協議

しているJR登別駅構内のエレベーターの設置に加え、交通結節点である駅前広場についても、北海道やJR北海道、交通事業者、関係団体などと整備に向けた協議を進めています。

また、登別のまちの魅力や地域の観光資源等の情報発信のほか、ウポポイの開設を契機としながら、白老町との連携による誘客促進を図る絶好の施設として、令和4年度中の供用開始を目指した『（仮称）登別市情報発信拠点施設』の整備を進めており、同施設を情報発信源としてさらなる『まちの賑わい』の創出を図っていきたいと考えています。

今後については、新型コロナウイルス感染症や国・北海道のキャンペーンの動向を注視しながら、道内を中心とした国内に対する誘客事業やインバウンドの来訪も見据え、受入環境整備を進めるとともに、他市町との連携を図り、観光客の回復を図る取り組みを進めていきます。



（仮称）登別市情報発信拠点施設のイメージ



JR登別駅広場と情報発信拠点施設のイメージ

登別市の四季



【春】郷土資料館の桜



【夏】オロフレ峠から望む雲海



【冬】登別温泉湯まつり



【秋】登別地獄祭り

